

2009年8月2日 主日礼拝メッセージ

題名：『私の心を一つに』

箇所：詩篇 86 篇

説教者：JECA 恵庭福音キリスト教会牧師 中川昭一師

序論 (導入)

ウェストミンスター教理問答の一問目は「人生の目的」で、その答えは「人の生きる目的は神を喜び、神の栄光を現すこと」というのは有名です。

神様によって救われた私たちが、本当にいつでも「神様の栄光のために、神様のみこころが一番となるように」という生き方ができるなら幸いなことだと考えます。

しかし、実際には、「神様の栄光を何よりも最優先すること」は、私たちにとって必ずしも喜ばしいもの、私たちが心から進んでしたいものとは異なる場合もあります。特に状況が激しい時、抜き差しならない時などは、「神様のご計画は、今は遠慮してもらって」と脇に置き、「とりあえず、このような助けが欲しい」「今だけはこうして欲しい」と、神様との豊かな交わりであるはずの祈りが、要求や取り引きを繰り返すものになってしまうことが、しばしばあるものです。

本論

「ダビデの祈り」と表題がついている詩篇です。

ダビデという人は聖書の中でも特に重要な人物ですが、様々な困難に遭ったり、自らも大きな失敗をしたりするなど、その人生は必ずしも平坦ではありませんでした。

この詩も、詳しい背景や状況を特定することはできませんが、一読して、作者が激しい状

況の中にあること。そして神様に救いの手を求めているということが明確に分かります。

(1) 私は神を恐れる者

作者は、自分の状況をこのように語っています。

(v7)「苦難の日」であり、(v13)「よみの深み」のようであり、(v14)「高ぶる者・・・横暴な者・・・いのちを求め」られ、(v17)「私を憎む者」がいる。

私の存在が脅かさされ、私自身が否定されると訴えます。

そこで作者は神にこう求めています。

(v1)「・・・答えてください」、(v2)「・・・守ってください」、(v3)「あわれんでください」、(v4)「喜ばせてください」、(v6)「・・・声を心に留めてください」、また (v16—17)「御顔を向け・・・御力を与え・・・しるしを行ってください」と祈っています。

問題が解決されること、具体的な助けがあることだけではなく、たましい、心の問題についても支えられることを求めています。

このような(ダビデの)祈りを見るときに、真っ先に、「神様を信じている(信仰者)なら当然だ/自然なことだ」と感じられるように思います。

私も「そうだ、その通りだ」と理解し感じるのはもちろん、「すごいことだな」とも感じました。助けが必要なときに、神様に全面的に頼っていかうとする、クリスチャンとしてはごく当たり前のことが当たり前にできる

ところに、ダビデが聖書の中でも重要な人物であることが分かるような気がしたからです。

「苦しいときの神頼み」という言葉があります。クリスチャンが使うときは、「困ったときだけ都合良く神様に頼る未熟な信仰」というような意味で使われるように思いますが、本当に苦しい状況の時には、それすらも難しい場合があるのではないかと考えさせられます。

特に、「なぜ自分がこのような目に遭わなければならないのか／私が何をしたいのか（理不尽／不条理）」というときにそうでしょう。“神様は祈りを聞かれる／ご自分の民を救われる”ということを知っているからこそ、どうしても疑問に思え、クリスチャンであつてさえも「神も仏もあるものか」というような気持ちになるときがある。いわば「苦しいときの神離れ」ということがあるのではないか。

ですから、厳しい状況の中で何よりも神様を求める作者に励まされるのです。とはいえそれは、どんな時でも立派に祈ることができる強い人”ということではなく、むしろ今直面している現実に対して“自分は弱いものである”ことを認めたありのままの自分に正直であること。そして、それでいて神様に対する確信をしっかり持っているという点においてです。

(v1)「主よ。あなたの耳を傾けて、私に答えてください。私は悩み、そして貧しいのです。」。作者は、「(神様の方から) 耳を傾けて欲しい／(自分は) 悩み、貧しい＝弱く、無力」だからですと祈り始めています。

大胆に力強く、自分の方から「私と共に戦ってください／私も力を尽くします」などとい

うことができない。神様の前でそんな背伸びをしても意味がないことをよく知っているということでしょうか。「私は力を失って弱っています。悩みや苦しみで頭を抱え身を屈めています。しゃんとすることができません。張りのある声も出せません。ですから、どうか神様あなたの方から私に近づいてください。あなたの方から耳をこちらに向けてください。」とそういうところから始めるのです。

私自身、普段から「御名を賛美します」ということばが単に信仰者らしさを装うだけの決まり文句になっていないかを反省させられます。

そして一方で作者は神様に対する確かな信頼を持っていたようです。

(v2)「私のたましいを守ってください。私は神を恐れる者です。わが神よ。どうかあなたに信頼するあなたのしもべを救ってください。」。作者は自分のことを「私は神を恐れる者です。」と言っています。私たちが、普段「神を恐れる」というときにはどのような意味で言っているのでしょうか。“神様にはすごい力があるから怖いです／神様は何でもお見通しなので怖じ気づいて(ビビって)います”ということでしょうか。

この〔恐れる者〕ということば。他の聖書では〔敬う者／慈しみに生きる者／掟をすべて守ろうとしている者〕と訳されています。むしろ反対の意味にも聞こえるくらい印象がずいぶん違いますが、原語のヘブル語では〔ハーシード〕ということばです。これは〔ヘセド〕ということばが元になっています。この詩の中でも〔ヘセド〕は(v5、13、15)にも出てきますが、その意味は〔恵み／誠実／慈しみ〕で、必ず上位者から下位者に使われ

ることばです。ですから「恐れる者」と訳された〔ハーシード〕には、〔(私はあなたの)しもべです／忠誠を誓う立場です／一方的に恵みを受ける者／その契約に生かされている者〕という背景があるといえます。

つまり、〔恵みを受けている者は、同時に神様を恐れている者〕ですから、〔恵みの下にいること〕と〔恐れること〕とは矛盾いたしません。それは、神のさばきではなく、恵みの神を主とするしもべとしてへりくだるといふ恐れです。

そういう意味で、「神様を恐れること」は、すなわち「神様の恵みに生かされているものであること」の確信です。それが(v7)の「…答えてくださる」という信頼に繋がっているのでしょう。

私たちは、しばしば神の恵みばかりを強調したが、むしろ神のしもべであること、神を恐れることが疎かになっていないかを省みる必要があるのではないかと。私たちもまた、積極的に「神を恐れる者です」と告白したいものです。

(2) 私の心を一つに

(実は)この詩篇は、しばしば“寄せ集めの詩篇”とも呼ばれています。

というのは、ここに出てくる表現が、他の詩篇ととても似通っていたり、ほとんど同じであるように見える箇所が多いからです。私も一通り拾ってみたのですが、やはり似通った表現をたくさん見つけることができました。しかし、その多くは同じダビデ自身、あるいはダビデと思われるものであったので、これは寄せ集めというより、むしろよく使うことばからさらに吟味して選んだともいえるのではないかと。

そこで、そのような詩篇だからこそ(v11)がとりわけ注目されます。何故なら、これだけはここにしかない表現だということと、文法的にも強調されていることから(v11)がこの詩の中心といえるからです。

(v11)「主よ。あなたの道を私に教えてください。私はあなたの真理のうちを歩みます。私の心を一つにしてください。御名を恐れるように。」。「一つに」というのは〔(何かと)一緒になる／結び合う〕ですが、それは「あの人(の)心と・・・」でもなく、「みんなの心が・・・」でもなく、「私の」心を一つにして欲しいといひます。

では、〔何と〕結び合わせて欲しい、一つにして欲しいと願っているのか。

エレミヤ32:39—40には、「わたしは、いつもわたしを恐れさせるため、彼らと彼らの後の子らの幸福のために、彼らに一つの心と一つの道を与え、わたしが彼らから離れず、彼らを幸福にするため、彼らととこしえの契約を結ぶ。わたしは、彼らがわたしから去らないようにわたしに対する恐れを彼らの心に与える。」とあります。

「心が一つ」にされるのは、単に集中できる精神力を求めたわけではなく、「神様から離れないため／神様のみむねと合致するため」であるということ。そのために〈私の道〉ではなく「あなた(神)の道が教えられること／真理」が必要だということです。

しかしどうして、この(v11)をあえて入れたのか。読みようによっては、“神の守りと助けを求めている”他の節との中では、少し浮いているようにも感じます。

もちろん、何となく思いついたので加えたということではないでしょう。作者は、今までにも何度となく“神様に助けを求め”それを

“詩（うた）”にしてきました。ですから、この（11 節）は、それらのことば、祈りがより深められたからこそ湧き出てきた、神様のみわざを経験してきた作者だからこそ必要なことばとして出てきたように思います。それは、神様に「守られる／助けられる」ことが、必ずしも私たちを神様に近づけること、神様への信頼をより深めるものとは限らないからではないか。場合によっては神様のみ旨通りに「守られる」ことで神様から離れてしまうなどということがありえるからだと思うのです。

私たちは、普段、（おそらく）毎日のように「お守りください」とお祈りするでしょう。クリスチャンが、神様に「守ってください」とお祈りできることは本当に大きな特権ですし、この詩篇のように、そう祈るべきであるともいえます。しかし、「人は神の栄光を現すためにある」という視点に立ったとき、私たちの「お守りください」が、“自分が願っている通りに／あの人の願い通りに／みんなが望んでいるように”という願いだけで終わってしまうとしたら、そこに自分なりに後はろめたいものがなかったとしても、結果的に、御利益信仰ということにならないでしょうか。

（家内は 2010 年 3 月 28 日に召されましたが）家内の闘病と共に日々を過ごしているとき、何度となく「守ってください」「何か何でも家内の病気を治して欲しい。いのちを助けてください」と祈り、私にとって唯一の（正しい）答えは、それ以外の何ものでもありませんでした。そういった願いが間違いだったとは思っていません。しかしその時、それ以外の“答え”は、“私にとって答えではありません”でした。もちろん、多くの方の励まし、

必要な治療費が与えられたこと、痛みは少なく、最期も穏やかだったことなど、確かに、私も家内自身も「守られている。助けられている」といえること。何より、御国への希望をしっかりと持っていました。しかし、私が望み、叫んでいた結果とは違いました。

このような時、私が取るかも知れない態度は大きく二つあります。一つは、「神様どうして聞いてくださらなかったのですか。何故、守ってくれなかったのか」と苦情を言ってそっぽを向くこと。もう一つは、「正直苦しいです。神様のお答えがよく分かりません。どうしても納得できません。しかしそれでもいつか、神様のみこころが私にもわかりますように」と願うことです。

自分が、神様を忘れやすい罪人、限界のある小さな存在であることを少しでもわかっているなら、（v8—10 のように）全知全能の神様に助けを求めたのですから「答えてください／守ってください」という祈りと、“神様の道／神様のみこころ”と「一つにしてください」という祈りはセット（一組）でなければならないと教えられるのです。

またこのような意味で、神様の「守り／助け／答え」は、何か一つの出来事が終わって終わりではなく、「私（たち）の心が（神様のみこころと）一つになる」まで続くものといえるのではないかと。

しかし、状況が厳しいほど「みこころのように」と祈ることは本当に大きなチャレンジです。イエス様も、苦しみながら「父よ。みこころならば、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願いではなく、みこころのとおりにしてください。」（ルカ 22：42）と祈りました。比べるまでもなく、弱い存在である私たちだからこそ、作者のよ

うなところから祈り求める必要があるのだと教えられます。

(v17) 作者は「いつくしみのしるし」(新共同訳:「良いしるし」)を行ってくださるようにと求めています。私たちはしばしば自分に敵対するものに対して、「懲らしめられればいい／自分が受けた分以上に痛い目に遭えばいい」と考えやすいのですが、ここでは、〈神様の良きわざが〉成されるようにと願われている。“憎しみの連鎖”ではなく、“神様の恵みとか正しさ(私が神に愛されていること)”によって解決がなされるようにということです。神様のみわざは“私の胸がすっとする／恨みを晴らせる”ためのものではなく、その答えによって、その出来事を通して、人々が“神様こそ助け主、慰め主”であることを悟るようにということです。神のご栄光が現されることが、私たちの人生にとっての慰めであり、幸いなことであるはずだからです。私の人生が神様のご栄光を現すためにあるとするなら、とても大切なお祈りだと教えられます。

結論(まとめ)

私たちは「守られて良かった」というだけの締めくくりではなく、神様を「恐れ」、そしてますます「神様と一つに」なっていけるように歩んでいきたいものです。